
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」

2019年度第1回研究会

日時：2019年5月25日（土曜日）14時から18時30分

場所：本郷サテライト5F

当日のプログラム

1. 野田仁（AA研） 趣旨説明
2. 野田仁（AA研）
3. 塩谷哲史（AA研共同研究員、筑波大学） 19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記
4. 全員 総合討論、今後の計画について

参加人数：13名

報告

「趣旨説明」

「カザフの歴史文献の情報源」

野田 仁（AA研・准教授）

研究代表の野田より、まず本課題の趣旨説明を行った。報告者が関心を持っているカザフ民族史を研究する報告者の関心としては、大別して①書面の記録の見直し②17世紀以降の歴史叙述の存在③歴史叙述と過去の取舍選択④ロシア東洋学の二重の規定⑤民族概念の問題に整理することができる。これをカザフのみならず中央ユーラシアの他の集団・地域に展開して考察することで共通項と相違点を検討しようとする試みであることを説明した。

これらの問いに具体的に答えるための事例を検討すべく、続けて「カザフの歴史文献の情報源」と題する研究報告を行った。1. まず、17世紀初頭のカディルガリによる『集史』翻訳補遺版の成立以降の歴史叙述の変遷をたどった。ロシア帝国との関係の深化にともなうロシア官僚・東洋学者らの記述の方向性と書き手の立場について整理を行った。2. 次いでカザフによる著作・出版物の出現として、20世紀初頭の系譜の出版、とくにシャカリムによる歴史書の出版が目目される。一方で1900-1910年代の叙事詩の相次ぐ出版も特徴的であった。ほかにマシュフルジュスプ

やシャディによる韻文の作品群が分析の対象となった。3. さらに西端のボケイ・オルダにおける知識人の活動や東の新疆における独自の知識人のありかたを考えると、彼らのネットワークと情報の共有とが19世紀末から20世紀初頭の歴史叙述に大きな影響を与えていることが指摘できる。

「19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記」

塩谷哲史（AA研共同研究員、筑波大学・助教）

次いで共同研究員の塩谷氏から以下の内容の報告があった。

本報告は、中央アジア南部のホラズム地方に成立したヒヴァ・ハン国（1512～1920年）における年代記編纂の過程を追うとともに、それらの叙述の変化と背景について考察を加えた。

18世紀以前のヒヴァ・ハン国領内では、年代記が継続して編纂されることはなかった。しかしコングラト朝（1804～1920年）の成立とともにその宮廷において、ムーニス、アーガヒー、サナーイー、カームヤーブ、バヤーニーといった宮廷史家たちが、継続的に年代記を編纂し続けた。そうした編纂事業は、ロシア帝国による軍事征服とハン国の保護国化（1873年）以降も続き、同時期に行われた宮廷でのペルシア語文学作品のチャガタイ・トルコ語への「翻訳」とも密接に関わっていたと考えられる。

最後に、ヒヴァ・ハン国領内、そしてその後のソ連体制下のホラズム地方（1924～1991年）において、「歴史を書くこと」の意味合いが変化していく過程についても概観した。帝政末期からロシアや君主であるハンを頂点とする宮廷に対して批判的な記述が現れるようになる。ソ連期に入ると、科学的な歴史研究とホラズムの過去に関する覚書的な著作が数多く著された一方、19世紀ヒヴァ・ハン国の宮廷で編纂された年代記は、カラカルパク、トルクメンなど諸民族別の史料集（年代記のロシア語への抜粋訳）に編集されて研究に利用された。年代記写本の校訂・出版やそれらにもとづく歴史研究は、やっとなソ連解体に前後して本格化したに過ぎない。

総合討論では、個別の質問以外に、今後の研究計画にかかわるコメントや提案が活発になされた。質疑を通して、歴史叙述・歴史文献の比較分析をどのように行うかという課題が浮上し、この点については今後も継続して議論をしていきたい。